

大きな飛躍、勇気ある撤退 日々刻々と変化する社会、決断を迫られる経営者 転機を活かし、現在活躍中の塾生にお話を伺った

甘えを断つ

大学卒業後商社へ入社し、28歳の時に家業のかばん問屋に戻るが、自分が売りたいと思う商品が無かった。また業者が企画生産したものを販売する仕事だけでは先が無いことを強く感じた。丁度その頃、青経塾へ入塾した。しかし、塾での厳しい指摘を受け入れることが出来なかった。古参社員への遠慮から改革が進まず、バブル崩壊後の環境と重なり業績が悪化。思い返せば自分自身の改革が一番できてなかったと当時の様子を語った。

日増しに進む業績悪化と共に、迫り来る銀行の圧力。そんなある日、NO.2である経理担当役員から辞表を突きつけられた。真剣に会社のことを憂うその役員の言葉を聞き「自らが稼ぎ、社員を幸せにする社長に変わらなければこの会社の存続は無い」と決意した。

翌日から、朝礼で自分の行動報告と当日の行動予定を発表し、毎日社員と売り上げ目標や自分の行動すべてに約束を重ね続け、甘えたがる自分を律する事から始めた。その甲斐あり着実な成果が現れ、業績回復の兆しを見せた。

大きな約束より小さな約束を着実に守っていくことが、結果を生み出す。青経塾に入らなければ気づくことは無かったかもしれないと語った。そして遠山先生に教えて頂いた、情熱を燃やし続けることが大切であるとも。こつこつ積み重ねた行動が今まさに龍屋左漸衛門を問屋からメーカーへ大きく羽ばたさせる原動力となっていることを実感した取材であった。

(第41青経塾 小谷厚志)

信じる力

「自分の力はこんなものではない」力強く語る横山氏はコーチングの世界に入り6年目になった。転機は青経塾入塾より少し遡る。生活用品などの販売員として15年携わる中で人がよりよく変化する場面に何度も立ちあってきたが、この経験を活かして自分の力をもっと広いフィールドで試してみたいという思いを持ち始めていた。そんな時にテレビの世界ビジネスサテライトで初めて「コーチング」を知った。話を聴くことでその人が持っている答えを引き出していくコーチングに興味を抱いた。すぐに欧米のコーチング事情を調べ、米国では大企業の重役が個人的にコーチをつけているケースが多いという事実を知った。日本の風習に馴染むかどうか未知数であったが、持ち前のパイオニア精神でコーチングの世界に飛び込むことを決断し、実行した。コーチ育成機関での3年間の学びをスタート、起業したのが入塾3ヶ月目だった。不安もあったが、自分にはできると信じていたのでまったく迷いは生じなかった。始めた頃はコーチングの認知度も低く相手にされなかった。その悔しさと青経塾での学びと決意をバネにして毎年ビジョンを立てて着実に実行してきた。この5年で個人コーチングからコーチング研修講師を経て、今は組織の中の関係性の可能性(上司と部下、営業と製造など)を引き出す『ハーモニーコーチング』というオリジナルな手法を考え出し、人の変化成長を通して企業に貢献できるように邁進している。「自分と関わる人みんなに、仕事人生を通して命をきらめかせてほしい」横山氏の目は輝き、将来を見つめていた。新たな分野に挑戦することが、新たな人生を切り開くのだと感じました。

(第36青経塾 柴田裕二郎)



株式会社龍屋半左衛門

代表取締役
石原和幸氏
(第22青経塾)



グリーンコーチ

代表
横山みどり氏
(第29青経塾)